📘 嬉野再生ビジョン

― 停滞の原因と希望の道筋 ―

嬉野を愛する市民有志（試案）

序文　静かな町に、再び光を

嬉野は、静かで、美しく、そしてどこか切ない町です。
山の緑、川のせせらぎ、そして温泉の湯けむり――。
この町は長い年月の中で、人々の手によって守られてきました。

けれど今、嬉野の時間は止まりかけています。
かつての繁栄を支えた温泉も茶も、形ばかりが残り、
人々の心は少しずつ離れていきました。

本書は、批判のためではなく、再生のための提案書です。
「もう一度、人と文化が息づく町に戻したい」
――その願いを込めて、ここに記します。

第1章　嬉野の現状と課題

1. 市政の惰性と忖度の構造

嬉野の政治は長く、特定の業界（温泉組合・茶組合）への忖度に支えられてきました。
市長選は激しく、足の引っ張り合いも絶えず、
政策は「票になるかどうか」で決まり、市民の幸福は二の次でした。

行政職員も、日々の業務に追われながら、
「何のために働くのか」を見失っています。
挑戦よりも安全、改革よりも沈黙――。
そうして、まちはゆっくりと老いていきました。

2. 箱物行政の残響

「建てること」が目的化した行政。
文化会館、観光館、交流センター。
どれも立派ですが、運営する人、活かす知恵が育っていません。
建物はあっても、心の拠り所がない。
それが、今の嬉野の象徴です。

3. 議会の停滞と風通しの悪さ

議会は本来、市民の声を代弁し、市政を正す場です。
しかし現状では、反対意見を言うことが「波風を立てる」とされ、
村八分のような同調圧力が残っています。

議員同士の切磋琢磨がなく、
「賛成しておけば無難」という空気が根づいています。
そのため、まちを変える議論が起きず、
若い議員も伸びません。

嬉野の再生には、まずこの閉ざされた空気を変えることが必要です。
異論を許す度量が、まちの成熟の証だからです。

第2章　なぜ変わらないのか ― 根本原因の分析

1. 利権と保守構造

政治と産業が長く癒着し、
行政は組合の顔色をうかがい、市民の声は届かなくなりました。
利権の維持が「安定」と勘違いされ、
挑戦する人ほど孤立します。

2. 行政の学びの欠如

公務員が「地域の未来をつくる人」ではなく、
「給料をもらうだけの人」になってしまった。
現場を知らず、市民の痛みを感じない行政は、
どんなに立派な計画を立てても心を動かしません。

3. 市民の無力感と諦め

長年の失望が、市民の心を静かに冷やしました。
「どうせ変わらない」「言っても無駄」――。
その無力感こそ、まちの最大の敵です。

4. 道徳と文化の崩壊

夜の街だけが賑わい、酒が慰めの代わりになっています。
近年、春日地区では酒が原因で亡くなった人が少なくありません。
それは単なる嗜好の問題ではなく、
希望を失った町の叫びです。

5. 民主主義の未成熟と閉鎖的風土

嬉野では、異論を唱える人が浮き、沈黙が「平和」と見なされます。
しかしそれは、平和ではなく停滞です。
沈黙は安心を守るのではなく、希望を奪う。

真の民主主義は、意見の違いを恐れず、
学び合い、譲り合いながら新しい答えを探す営みです。
嬉野が変わるためには、まず“話し合う勇気”を取り戻さねばなりません。

第3章　再生への方向性

1. 政治と行政の刷新

組合依存・忖度政治からの脱却

若手・女性・外部人材の登用

公務員が「まちをデザインする人」になるための研修と実践

議会に「対話と創造」の文化を根づかせる

2. 産業と経済の再設計

放棄茶畑を「体験農園」「環境教育」「エコツーリズム」として再生

温泉街を「癒し＋文化＋体験」の拠点へ

観光客を“もてなす”から“交わる”関係へ

農業、観光、アート、教育の連携プロジェクト

3. 文化と教育の再生

酒ではなく、音楽・芸術・語りが人を結ぶ場を

子ども、高齢者、移住者が交わる「まなび舎」構想

地域学校、市民団体の協働で、道徳と感性の教育をもう一度根づかせる

第4章　新しい嬉野モデル ― “癒しと再生の町”構想

温泉 × 文化 × 信頼 × 自然
　温泉だけではなく、人の心を温めるまちへ。

市民がつくるまち
　行政任せではなく、市民・事業者・NPO・学校が共にまちを運営する。

道徳・文化の復興を軸とした観光
　「酒に酔う町」ではなく、「心が癒される町」。
　静けさの中に希望がある町、それが嬉野の未来です。

結章　希望は沈黙の先にある

嬉野は、変わる力を持っています。
それは新しい建物でも補助金でもなく、
人の心と文化の再生によってのみ甦ります。

反対を恐れず、声をあげる人。
批判ではなく、共に考える人。
沈黙の町に、もう一度「対話の灯」をともすこと。
それが、嬉野再生の第一歩です。

この町が、
再び人を育て、心を癒し、希望を語れる場所になりますように。

以上

デローラ多加子